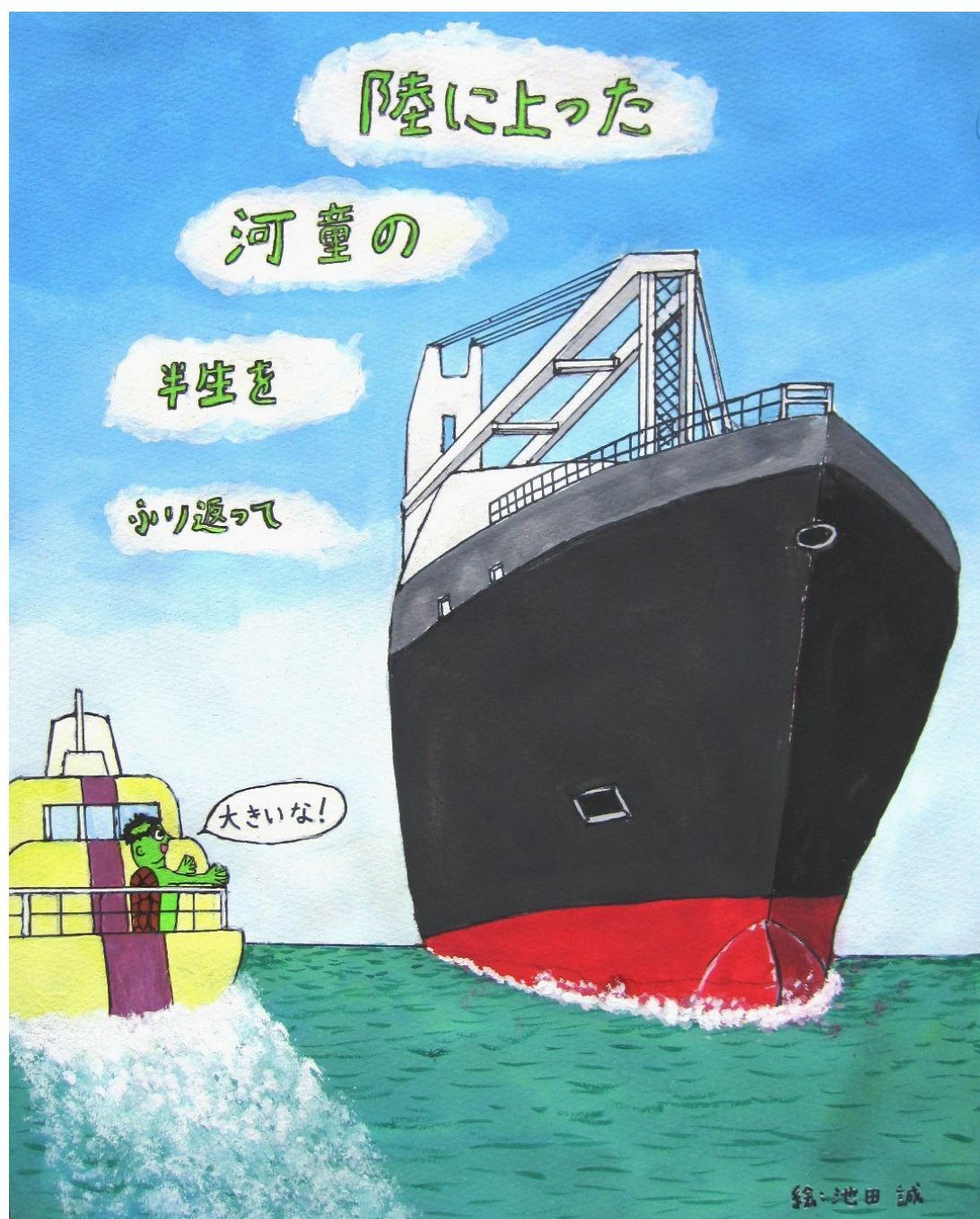


陸に上がった河童の半生を振り返って



人間万事塞翁が馬。偶然の生はありがたい。

【 はじめに 】

神戸商船大学を卒業後すぐに陸に上がってしまったので、同窓生とはあまり親交はなく齢を重ねてしまった。昨年（平成25年）卒業45周年記念で神戸の舞子ビラでの同期会に参加した。懐かしい同期生との再会、そして間もなく同期の友の葬儀への参列、そこであった東京商船大学の同期との再会、二水会への参加と交友が進むなかで、船長協会の増田さんや海洋会専務理事の甲斐さんとの出会いがあった。また、東京で行われた海神会では、同期である海神会会長の久保さんとも再会した。それらの会で話題に上ったのが「最近の卒業生は船に乗らない人が多い、陸に上ってどのように過ごしたか書いてみないか・・・」という誘いの言葉であった。この機会に、商船大卒という肩書を背負って過ごした「遠回りの人生」を振り返るのも良いのかな・・・と思った次第である。

執筆をあと押ししたのは、人生の岐路のなかで、自分の思うままの選択により、苦勞をかけた家族や唐突な別れとなった方達に対して、心のどこかで懺悔したい気持ちがあったかも知れない。また、人生の最終コーナーを迎えるにあたって、今後どのように老後を過ごすか、見直す機会にしたいと思ったからでもある。

2014年8月1日

須賀 弘

（追記）表紙の絵は、池田誠氏のご厚意により作成してもらったものである。



1. 遠回り人生のスタート

昨年、仕事で呉港から松山港までスーパージェットで渡った時のことだった。外国船のそばを通過した。その大きさをまざまざと実感した。その時、なぜ自分は船に乗らなかったのだろうか、もっと苦勞しない人生があったかも知れない・・・と自問自答してみた。思えば、外国にあこがれ、船にあこがれ商船大学に入った。学校生活も寮生活も面白かった。クラブ活動は水泳、テニス、そしてギタークラブと充実していた。乗船実習では、いろんな港に立ち寄り、特にハワイへの遠洋航海は仲間と過ごした楽しい思い出が詰まっている。

遠回り人生のきっかけは、経済に興味を持ってしまったことかも知れない。卒論は東海林先生の「海運経済」を専攻した。経済学の基礎を学ぶために、神戸大学の第二学部の聴講生にもなった。「Shipping is Poor country business」という言葉をいまでも思い出す。そのころ海運業界は、伝統的な三島船(three islander)からコンテナ船、タンカーが雨後の筍のように建造ラッシュ期を迎えていた。日本経済は高度成長期にあり、海外物流が勃興していた。当然のこととして、慢性的な船乗り不足を抱えており、卒業生は支度金付きで船会社に迎えられていた。そのような時代の流れを「海のロマンがなくなる」と短絡的な考えを持ってしまったのも事実であった。第一志望は商社であった。中堅どこは可能であったが、大手は狭き門で乗船実習もあり十分な就職活動はできなかった。結局、安定志向をしてしまい、快く受け入れてくれた大阪に本社がある「同和火災」を選択したのである。これが、遠回り人生の始まりであった。航海科80名の中で最初から陸に上がったのは2名だけであった。



2. 30 年余りのサラリーマン生活

① 関西から始まり

入社当時、金融機関は国家保護の真ただ中であつた。保険会社も例外でなく、経営の厳しさは感じられず社風も穏やかであつた。物足りなさを感じ、商船大学に中古ヨットを置いて乗ったり、挙句の果てに入社3年目、2か月の休暇を取って、東南アジア・インドの旅行をした。今で思えば、とんでもない社員であつたが、辞めさせられなかった。真に温情みのある会社であつた。

旅行前は大阪本社貨物保険の査定業務についていた。帰ってから大阪支店船舶営業に配属されたが短い期間であつた。コンピュータ時代を迎えるにあつて、全社的に情報システム部門を充実することになり、そのメンバーに選ばれた。結婚もしていたので、腰を落ち着けて仕事をせざるをえなかった。コンピュータセンターは西宮にあつた。そこでは、船舶保険のデータベースシステム、自動車査定オンラインシステムに関する開発業務などを担当した後に、コンピュータ教育の普及活動に携わつた。最後には、関西の生保・損保5社のEDP（コンピュータ部門）部会の幹事役を経験させてもらい共同論文をまとめた。情報システム部門での10年近い経験は、会社を辞めてからの仕事に大いに役立つこととなる。

② 札幌での営業

もともと営業は希望であつた。海上保険分野ではポストが少なかったが、自動車・火災などノンマリン部門のマーケットが拡大していた。そのような理由と思われるが、北海道札幌での企業営業課に配属された。全く知らない土地で、しかも経験のない分野で一兵卒として船出であつた。既に39歳になっていたので、入社同期では営業課長職に就いていた人もいた。

しかし、希望した部門であつたので嬉々として仕事に取り組んだ。ノンマリンの営業は、代理店先を回るルート営業である。金融機関・建設会社・不動産会社・会計事務所等の代理店先を開拓したり支援したりする活動である。保険の知識や保険金の支払については、会社に帰って調べ対応すればよいわけであり、代理店先の保険開拓提案、本業支援の情報提供や代理店間のネットワーク化に力を注いだ。札幌は本土からの人を受け入れる解放的な街であり人脈は作りやすかつた。営業数字にはあまり苦労しなかつた。札幌時代の9年間は、四季折々の大自然を味わい、旅行を楽しみ、家族ともども仕事と遊びに充実した時期であつた。

③ 抜擢と早期退職

会社創立50周年記念事業として、社内論文の募集があった。札幌での営業活動をテーマにした「地方都市における営業ネットワーク戦略」の小論文を投稿したら、幸運にも入選した。札幌での営業実績と入選がきっかけとなり、営業副部長から東京本社の企業営業部長（金融・海運）に抜擢された。丁度、地下鉄サリン事件が発生した年であった。

いいことがあるとその反動がくるのが人生の条理なのかも知れない。役員とのネゴシエーションを駆使して上手く立ちまわれる才覚は持ち合わせていなかった。その上、長い間保護されていた金融業界の垣根が外れられ、自由化の嵐が迫りつつあった。IP事業部の責任者に転出させられた。この部門は、損害保険の直販部隊で首都圏に3カ所の拠点をもち、30名程度の直販社員を抱えていた。生保と損保の垣根が外され、生保販売も可能になり成績を上げれば脚光を浴びる部門であった。しかし、競争の激しい首都圏のマーケットで、生保の販売網に対抗して顕著な業績を上げることは、奇跡を期待するようなものであった。やがて、日生との経営統合が決まるや否や廃部になることが決まった。直販社員の整理業務が課せられた。再雇用組、退職組、代理店として独立させるグループ、それぞれ膝を突き合わせて選択を迫った。このような後ろ向きの仕事はだれも関わりたくないのであろう、組織の持つ冷たい側面を身に染みて感じた。時を同じくして、早期退職制度が実施されていたので、直販社員の整理が終わったときに、自らその制度を選択した。55才の時であった。

その後同和火災は、ニッセイ同和となり、大東京グループと合併し「あいおいニッセイ同和」となり、更に三井・住友海上グループとの経営統合を通じて、現在はMS&ADホールディングスの傘下となっている。保険業界の自由化の嵐はすさまじかった。一旦垣根が崩れると、損保19社体制が一举に崩れ、結果的に東京海上グループ、損保ジャパングループの3社に集約されてしまった。同和火災は、全国に支店があり約三千名の社員を抱える大きな組織であったが、グローバル化という大海に投げ出されると、一介の小舟にすぎなかったことが現実のものとなったのである。



3. コンサルタントとしての独立

① チャンス到来

「一歩踏み出せば人生が変わる」この言葉を実感したのは、関連子会社（リスクコンサルティング会社）に一時的に在職した時のことであった。その会社が、ISO（品質マネジメントシステム）の認証取得をすることになった。そこで構築メンバーに加えてもらい、審査員の資格も取得する機会を得た。その年（2000年）、雪印食品の大規模食中毒事件があった。子会社の名前で、食品安全とISOのセミナーを開催したら十数社集まった。そのなかの鶏卵加工会社と集団給食会社がISOの取組みをすることになった。会社の許しを得て、2社のコンサル契約をもって独立した。たった1年間の出来事であった。

独立後もISOの小冊子を作ったり、月刊誌に投稿しているうちに、全農米穀本部とのパイプができた。全国の精米工場約30社のISOの認証取得を支援させてもらうことになった。また、常陽産業研究所などコンサルティング会社との業務提携も進んだ。一人ではできないので、食品工場の経験がある麒麟ビールOBの石村靖氏、大林組OBの村野和夫氏、そして同和火災OBの岩井忠氏と4名で会社を設立し、本格的にISOコンサルタント事業に取り組むことになった。この時期は、ISO認証取得の勃興期であった。

② ISO マネジメントシステム

ISOとは国際規格のことである。幾つかのISOがあるが、主として品質マネジメントシステムの分野を携わった。これは製品やサービスの質を保証する第三者機関による認証制度である。その中身は、顧客の満足を目指したPDCA（計画・実行・確認・見直）という管理システムを構築することである。いわゆるISOの要求事項（決まり）にそって企業に適した手順や記録を作るわけである。ワード・エクセルなどコンピュータの技術的な知識だけでなく、システム工学的なセンスが必要となる。保険に関する業務と全く関係ない仕事であったが、企業の実態にあったマネジメントシステムの支援は、コンピュータシステムの設計と似ており、同和火災の情報システム時代に培った経験を生かすことができた。

全農のISOの認証取得支援が一巡したあと、ISO審査機関に食品分野で審査員として登録し活動することになった。コンサルはシステムを造り運用支援する側、審査はそれを検証する側であり表裏の関係にある。コンサルは自由な発想で構築できるが、審査は主観的な発言は押さえないといけない。

審査員としての面白さは、受審先で経営者の考え方を聞いて、各部門担当に聞取りをしながら、短時間の間に問題点を指摘しなければいけない。この間に、会話力（とくに聞取り）、問題点の発掘能力、そして文書を纏める能力、スケジュール管理など総合力が必要となる。よい指摘をして顧客に喜ばれたときは、少なからず達成感はあった。

③ 絆の崩壊と復活

東日本大震災の翌年 2012 年 7 月 29 日、息子が急死した。とても暑い頃であった。お嫁さんが 2 番目の子供を出産するために実家に帰っていた。携帯電話がつかないという連絡があり、家内がアパートを訪ねたてみると、ベットの上で眠るように倒れていた。虚血性心疾患 36 歳であった。

調理専門学校を卒業した後、菓膳を修業するため富山の割烹料理店に入っていたが、結局地元の海鮮居酒屋に務めることになった。その後 15 年、調理長まで任され魚捌きは一流になっていた。結婚して東京に帰ってくるというので、お店を持たせるために所沢に居ぬき物件を購入した。30 席余りの掘り炬燵のある手ごろな物件であった。お店の売りは新鮮な魚を都会の人に食べてもらうことであった。割烹居酒屋で「ゆわん」（結ぶ湾）という名前を付けた。「産地とお客を結ぶ、人と人の和を結ぶ、家族の和を結ぶ」という三つの絆を看板とした色紙に書き、店内に掲げた。今まで転勤でバラバラになっていた家族の絆を深めたいという気持ちが根底にあった。

富山から産直のために仕入のコストがかかった。調理場は一人で、アルバイトを使って頑張っていた。開業 1 年目を過ぎたころから、徐々に固定客も増えはじめ月間の黒字化が見え始めた矢先であった。知らない土地での厳しい経営、一人で無理をさせてしまった。愛妻と 1 歳 4 か月の長男、そしてお腹に次男を残しての旅立ちであった。息子を中心とした三つの絆は淡くも崩れさったのである。

しかし、その絆が復活したことを触れておかなければいけない。それは、常連客のなかで息子の縁で親しくなった奈良田、山本家 2 組の若夫婦である。悲しみを共に慰めてくれるだけでなく、時にふれ食事や遊びに誘ってくれる。飛騨古川にいるお嫁さんと二人の孫、そして長女と次男の他に、新たに 4 人の子供と孫ができたようである。

今年 7 月、三回忌の法要で再び飛騨古川を訪れた。この街は、日本の原風景が残っている。古い建ち住まいが多く、用水路には鯉が泳ぎ、せせらぎの

流れがあちこちで聞かれる静かなところである。しばしの間孫達と会って、帰りには骨壺を持ち帰った。腕の中でずっしりと重たかった。



4. 老いの自立

① ISO の新しい時代

品質マネジメントシステムが誕生したのは1987年、27年前のことである。現在では世界で100万社は超えており、日本でも5万社程度は存在している。

ISOは品質だけでなく、環境・食品安全・情報セキュリティ・交通安全・エネルギーと取り組むテーマごとに誕生している。また、ISOは7年ごとに改定されるルールになっている。ISOの細分化が進む中で、この度どのISOでも通用できる共通の規格が策定された。この内容をみると、経営環境を踏まえた戦略を策定することが要求されており、ビジネスモデルへ進化しているように思える。

品質マネジメントシステムの審査経験を通じて感じることは、ISOを上手く使いこなしていない企業がみられる。特に中小企業は、ISOを経営強化の道具として活用できる可能性があるにもかかわらず、実現されていないところが多い。品質マネジメントシステムについても、来年度には共通の枠組みに沿って大幅な改定が予定されている。これからは、ビジネス活動を支援する道具として生かす絶好の機会がやってくるのではないかと考えている。

② 余生の過ごし方

昨年末、お世話になった審査機関に審査を辞退する旨申し入れた。昨年は数多くの受審企業先を訪問した。北海道から九州まで移動を含めるとかなりの負担になっていた。考えてみると、過去3か年、コンサルティング、審査、そしてお店の事と多忙であった。幸いにして「ゆわん」を引き継いでくれる人が見つかった。これを機会に本来業務であるコンサルに回帰したいという思いが強くなった。退職してから12年間、仕事では多くのお客様にお世話になった。今までの経験から、ISOは中小企業やサービス業にとって有効な管理ツールになると確信している。改定期を迎えて、この内容を伝えるのが残された役割ではないかと思っている。年を経るにしたがって、記憶力は確実に低下するが、経験を踏まえた思考力や提案力を向上することは可能であろう。そう思って、気力と体力を保ち続けていきたい。

NHK番組「こころの時代～宗教・人生」で聞いた「死は必然、偶然の生はありがたい」という言葉は、息子の死を経験して深く心に沁みた。精神科医師：永尾雄二郎氏の話である。来年は自分も古希を迎える。「古希」とは、杜甫の詩で「酒債は尋常行く処に有り 人生七十古来稀なり」に由来するようである。当時は、70歳まで生きることは珍しかったらしい。そんなに齢を経た実感がわからないが、あと10年すれば、男性の平均寿命に達する。そして、20年後はまず生きていないだろう。そう考えると、生きている今が、有難いし愛おしくも感じる。残された人生をできるだけ有意義に過ごしたい。それには、出会いを大切にし、家族を大切にし、元気な体をできるだけ保ち、意思をもって終末まで生きることではないだろうか



【 終わりに 】

半生を振り返ってみると、「人間万事塞翁が馬」という諺があるが、幸福と不幸が交互にやってくることを身に染みて実感している。商船大学の経験は自分の人生にとって何を与えてくれたのだろうか？ 海や船を通じての人生のロマン、負けじ魂、仲間意識、シーマンシップ・・・言い換えるならば「人格形成の場」ではなかったか。航海技術や船舶知識を直接役立たせる機会は少なかったが、社会に船出して「自立して生きる知恵」を育んでくれた。半生を振り返って、決して順調な人生ではなかったが、くじけずに骨太な生き方が少しでもできたのは、学生時代の経験が少なからずあったと思う。

海原の中で船舶という大きな海洋構造物を世界に運ぶこと、それは単に操船技術だけでない、語学・法律・経済学・気象学・心理学など総合的な知識を学び、大学を超え同世代の仲間と体を使い、心を通じあう乗船実習の場があった。社会で必要なのは知識だけではない、それを生かす知恵と努力、そして他者への思いやりである。東京・神戸の両大学とも統合や総合大学に組み入れられ「商船」という冠はなくなってしまったが、今後とも総合力と人間力を養うユニークな場であり続けて欲しい・・・と秘かに願っている。

